

奉仕の一生 *A Life of Service*

November 4, 2019

By Senior Airman Matthew Gilmore
374th Airlift Wing Public Affairs

新しいリードがドアに掛けられ、いつでも長い散歩に出かけられる準備ができています。家のいたる所に、おもちゃがそのまま散らばっている。暇が重くなったら昼寝につくためのテンピュールペディック・メモリーフォームのベッドが片隅にある。そして生涯愛してくれる家族がいる。犬舎で過ごす生活はもう終わった。長年の職務を全うした引退後の生活が始まった。

これまでパトロールと爆発物探知を専門とする横田基地第374憲兵隊の軍用犬を務め、このほど引退し里親に迎えられた「トパ」にとって、ここが家だ。

「トパは、余生をずっとソファで過ごせるほどの貢献をしてきた。過去2年間、トパのハンドラーになれたことは幸運だった。トパの目を見ると、任務に必要な全ての指令を受け止めていることが分かった。軍用犬として働き始めた日からそうだった」と、トパの前任のハンドラーであり、トパが引退した後に里親となった第374憲兵隊軍用犬ハンドラーのコディー・ニッケル軍曹は言った。

トパは、他の米空軍の軍用犬と同じように、テキサス州サンアントニオのラックランド空軍基地でキャリアをスタートした。2011年、トパはどの部隊でも優秀なチームの一員として任務できるように必要な制圧（噛みつき）や探知スキルを習得するための6か月間の厳しい訓練を受けた。2012年4月に最初の課程を修了すると、トパは横田基地に配属され、身体的な理由によって引退するまでの7年間、この基地で任務続けた。

「この7年間、トパは米国大統領、米国副大統領および防衛長官の護衛に必要な探知スキルを発揮し、日本、インド、ラオス、ミャンマー、グアム、シンガポールでの任務を支援した。派遣に行かない時、トパは横田基地で私について訓練し、基地を守っていた」とニッケル軍曹は振り返る。

「犬にとってこれほど長く続けること自体、厳しいことだ。風雨の中でもパトロールや訓練を行い、どんな時も精一杯の速さで前に進む。フェンスを越えたり、車に入りこむ時も、全速力だ。制圧（噛みつき）とパトロールを並行して行う任務は、犬の体に相当な負担を与え、その負担は蓄積されてしまう」

トパは、一日中働き続けたことによって、脊柱の軸線に沿って過剰な骨が形成され、任務を続けることが難しくなった。しかし、日々の任務がトパの体に負担をかけた一方で、ハンドラーと共に訓練した日々によって空軍を引退した後も続く絆を築いた。

「ハンドラーは担当する犬と、とても強い絆で結ばれる。犬は生来とても活発で忠実だ。ハンドラーと共に任務に就けば、犬がハンドラーを見る姿からそれがすぐ分かる。その絆の深さは言葉で表すことさえ難しい」と第374憲兵隊犬舎主任マシュー・クラーク技能軍曹は言った。

「なので、犬が引退する際には、往々にしてハンドラーが里親の候補として優先される。その時が来た時、ニッケル軍曹がトパにとってどんな存在か、しっかりと世話をされ、トパにふさわしい引退後の生活を送れることが容易に想像できた」

トパは引退後に住む家が決まり、ニッケル軍曹とモニッカ夫人のもとに落ち着いた。現役の軍用犬が付けているまじめな首輪とは対照的に、「ペット・ミー」と書かれた首輪を着けた姿は、トパの新しい生活の始まりを象徴していた。



「トパは最高の犬だ。トパを見ていると、私が彼の全てであり、私にとってもトパはかけがえのない存在だと感じる。一番嬉しいのは、今ではトパが私の家族の一員であるということ。なので、これからは家族でトパをもっと可愛がれる」

「我々の愛情に充分満たされていても、トパにとって必ずしも引退後の生活は楽ではない。トパは私が毎日、制服を着ているのを見て、外に出てこれまでの2年間一緒にそうしてきたように仕事をしたが。トパは私について仕事場に來たがるが、その度にトパの任務は終わったんだということと家のソファで昼寝して良い子にしているように言わなくてははいけない」

「トパは引退後の自由な生活を手に入れた。ヒーローが必ずしもマントを着けているわけでないように、右手を挙手し入隊の宣誓を行わずとも軍に貢献する仲間がいる。トパはそれを証明している」